

## 近世和漢朗詠集注釈史論考

村上, 義明

<https://hdl.handle.net/2324/2235994>

---

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

(様式3)

氏 名 : 村上 義明

論 文 名 : 近世和漢朗詠集注釈史論考

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

一条朝を代表する文人・藤原公任によって編まれた『和漢朗詠集』(以下『朗詠集』)は、中国漢詩・日本漢詩・和歌のアンソロジーである。本書は成立以来、書道の手本や詩歌詠作のための基礎教養書として用いられてきた。だが国文学研究では、中古中世の『朗詠集』受容史研究は盛んであるものの、近世期を対象としたものとしては、わずかに板本の整理ほかが行なわれているにとどまる。そこで本論では近世期の『朗詠集』受容史研究の一環として、注釈書刊本に焦点を当てた。

序章「先行研究と本論の問題意識」は、『朗詠集』にかんする先行研究をまとめたものである。まず『朗詠集』の概要と中世期までに成立した諸注釈書について言及し、次いで近世期の受容史研究の状況を整理しつつ、本論の課題を提示した。

第一章「近世の和漢朗詠集注釈史総説」では、近世期に刊行された『朗詠集』版本の構成要素を示し、このうち「注釈」には、形態と内容によって違いがあることを押さえ、『朗詠集』注釈書刊本十一種を紹介した。その際、注釈書によって学術専門的な注釈文を有するもの(詳注)と一般教養的な注釈文を有するもの(略注)があること、加えて、その刊行された時期が大きく第一期と第二期の二つに分かれることを指摘した。

第二章「北村季吟『和漢朗詠集註』論」は、古典学者・北村季吟による『和漢朗詠集註』(以下『集註』)に焦点を当てたものである。本書は、はじめて「和」と「漢」双方の注釈を完備した『朗詠集』注釈書刊本であった。これまで、永済注の詩文註に、季吟が和歌註を付したものと捉えられてきたが、詩文註にも季吟による注釈文が多数見られることと、和歌註についても、単に先行する注釈書の記事を多用するだけでなく、季吟自身の注釈文を多々含むことを指摘した。最後に歌書を刊行することがまだまだ憚られた時代にあつて、『集註』の刊行が、その後に続く季吟による歌書の注釈書の執筆・出版のきっかけを作ったことにも言及した。

第三章「岡西惟中『和漢朗詠詠解』論」は、談林俳諧の論客・岡西惟中の『和漢朗詠詠解』(以下『詠解』)に着目したものである。岡西惟中の注釈書については、これまで「権威付け」と「孫引き」という点に目が向けられてきたが、先行する『集註』との対照の結果、『集註』の修正や、『集註』とは異なる資料を多用していることを指摘した。その上で、『集註』に比して

『諺解』が後代に読まれる機会が少なかったことについて、①『朗詠集』が一般教養書として受容される過程で、注釈書も簡易化していく傾向にあったのに対し、『諺解』はこの傾向に逆行するものであったこと、②『諺解』が大坂という市場を潤すために刊行された、ある意味地域限定的な注釈書であったと考えられることを述べた。

第四章「高井蘭山『和漢朗詠国字抄』論」では、近世後期に数多くの教養書を著した高井蘭山の『和漢朗詠国字抄』（以下『国字抄』）を取り上げた。前提として、第一節「高井蘭山の家系と著述活動」では、これまで明らかにされてこなかった蘭山の伝記研究を行なった。まず辞書的な記述が踏襲されてきた観のある蘭山の名号について、同時代資料を用いた検証を行ない、次に蘭山本の調査によって明らかになった彼の家系に関する情報を集約して家系図を提示した。最後に書肆・花屋久次郎との深い関わりにも言及し、花屋が蘭山を著述家として育て上げた書肆の一人であったことを述べた。『国字抄』もまた、その花屋の需めによって成立したものである。

第二節「高井蘭山『和漢朗詠国字抄』論」では、まず『国字抄』が『集註』をもとに成立したことを明らかにし、次に京都女子大学図書館吉沢文庫本の刊記によって、四板主・島屋平七までの板権の移動過程を示した。そのうえで活字本や雅俗文庫本などにより、明治に至るまでに六板主までの存在が確認できることを述べた。これにより『国字抄』が成立から明治期に至るまでよく読まれたことが裏付けられた。最後に、『国字抄』後に刊行された山崎美成の『朗詠集』注釈書が、『国字抄』を編集した簡易版であったことも指摘した。なお、第三節「高井蘭山著述年譜」は、高井蘭山の著述年表である。

終章「近代の和漢朗詠集—まとめに代えて—」では、まず本論で述べてきたことをまとめ、次いで成立年代により近い善本を重要視する近代の『朗詠集』研究の登場により、江戸時代に成立した板本や諸注釈書が軽視され、現代に至るまでの様相を記した。

なお、高井蘭山と書肆にかんする研究の延長線上に位置するものとして、付論「高井蘭山嗣編『新編水滸画伝』の成立と流布」を加えている。『新編水滸画伝』は、曲亭馬琴が初編を著し、蘭山が二編から九編を記したもので、蘭山嗣編のいきさつから、全編の完成、そして明治期に至るまでの過程を明らかにした。